



角田由紀子
(弁護士)

ドメスティック・

バイオレンスのない

社会をめざして

門限のある 生活

離婚をしようかどつしようかと迷っていた女性から、その生活状況を聞いてびっくりした。彼女は40代半ばである。結婚して20年以上経っている。子ども一人は既に成人している。夫は自営業でそれなりに財産を築き、経済的には恵まれている。しかし、彼女の結婚以来の悩みは、夫に奴隷扱いされてきたことだ。彼女は自分の扱われ方を「奴隷扱い」と表現した。結婚したときに夫から、妻は夫のいうことを何でも聞いて尽くすものだと、言い渡されたという。夫は自分の信念に従って結婚生活を過ごしてきた。一方、彼女にとつての結婚生活は、経済的に恵まれていたことを除けば、自由のない生活であった。5時が門限であり、友人、知人との交際は許されず、実家に泊まりがけで行ったこともないという。夫の規制に違反したときには、暴力も振るわれたという。こんな生活を20年も送って

きたと聞かされて、言葉もなかった。彼女は、世の中でドメスティック・バイオレンスという言葉が使われるようになって、自分も暴力を振るわれてきていたと考えるようになった。夫との生活を耐え難いと思うようになってきた頃、女性に対する暴力の問題が認知され始めていた。「私もDVを受けているんですね」と、確認するように彼女は話し続けたが、離婚の決心は揺れていた。夫の庇護を離れて、一人で経済的にやっていく自信がなかったからだ。

彼女の直面している状況は、ドメスティック・バイオレンスの被害を経験している女性に共通する。夫が結婚によって妻を自分の支配対象と位置づけ、女性を対等な人間としては扱わない。一方、妻は経済力を持たないが、夫のおかげでそれなりに豊かな生活を享受している。暴力的な夫の言動に悩み、自分は「奴隷扱い」されていると思いつつも、夫との生活をやめて外の世界に行くことには大きな不安を持っている。家庭の外の世界に待ちかまえる経済的厳しさが、妻に二の足を踏ませる。さらに、結婚によって誰々の妻という自己認識を作ってしまったら、いつか「の妻」でなくなる自分に自信が持てない。彼女のこの不安を利用して、夫は文字通り「主人」であり